



國學院大學
栃木短期大学
栃木市平井町608
〒328-8588
TEL0282-22-5511
FAX0282-22-5743
編集 学報編集部

第159号

あら草のそよぎ身を削ぐ
さびしさに秋の草生をい
でてきにけり
『滄浪歌』 岡野 弘彦

きょうを生きる思想「共生」

学長 中村幸弘

人類は、いま、自然の征服を是とした近代の文明主義を反省する時代に入りました。例えば単一作物の大量栽培は、土壌を荒廃させ、生態系を狂わせ、引いては、地球に環境汚染や資源枯渇までもたらしたのです。そこで、もう一度、自然と共に生きようという声を、いま、世界の諸方に聞くのでしよう。

近代の国家は、大多数を占める民族が少数民族を同化させる方向で、侵略とか戦争とかまでして、それが発達だと思ひこんできました。その結果、言語や宗教など、固有の文化を捨てさせられる人々が出てしまいました。当然、互いの文化を認め合う多文化主

義の叫びともなったのです。

そういう、時代の考え方を、日本では、「共生」という言葉に担わせるようになってきています。それまで、生物学の世界に、複数の生物が同居し、互いに密接な関係をもつことを「共棲」と呼ぶ術語がありました。その書き換え表記「共生」の出現と、これら、環境問題から起こった、また、社会学的な立場から起こった（共に生きる）考え方が、いつか結びついて、今日の「共生」となったものと見てよいようです。

昭和二十一年十一月十六日制定の当用漢字一八五〇字のなかに、「棲」字は入りませんでした。そこで、昭和五十年

代ごろまでは、「共生」とあっても、へ共に棲む」意でしかありません。（共に生きる）意の「共生」は、大まかにいつて、平成に入る、ちよつと前ぐらいからです。

そのころ、私は、学習用国語辞典を、新規に編んでおりました。その「共生」、早くも、時代の先端を走る評論・論説には頻用されていました。し



「國協総合教養」国文学科
(9月30日 撮影)

かし、既刊のどの辞典を見ても、目の前の本文読解に役立つ語釈は見当たりません。編集部から届いた大量の用例資料を思い切つて二つに分類、そして、それらは、へ自然と人間が、地球上で調和してともに存続していくこと。また、その状態」と個性を認め合い、ともに助け合つて生きること。また、その状態」という、二つのブランドとなりました。

その辞典は、二〇〇三年に刊行されました。もちろん、「共生」だけではありませんが、その「共生」についてだけは、その理解が十分ではない段階で作業させられてしまったのですから、いまでも、不安な思いは消えていません。そして、この数年、その思想をもつて仕事する人々が多くなったことに驚いています。

昨〇七年十月、黒川紀章氏が亡くなりました。「共生」の思想をもつて、建築の実務に当たり、都市を論じた方でした。氏の建築のどこに、それがうかがえるか、私などにはよくわかりませんが、それでも、その姿勢は見えてきまし

た。それが、現代を生きる態度として、日々の生活に欠くことのできないものとも思えてきました。

「共生」は、いま、地球で生きていこうとする全生物にとつて必要な心がけとなっています。もちろん、それぞれの世界が一定のバランスを保っている間ということで、いつかは、また、新しい思想が必要となります。人間は、時代の思想を言葉に託して伝え広め、新しい生き方をみんなが求めていく目安とするものだ、と、思います。いま、至るところに見る「共生」の二文字、その二文字が登場してきた経緯の一端を申し上げて、私自身も、その「共生」を、きょうを生きる思想にしたいと思っております。

学長が自ら授業をし、しかも全学科を担当しているということ、関係各方面やご父母から、その内容のお尋ねがありました。そこで、その「國學院大學栃木短期大学総合教養」の六月ある週の授業の一部を紹介することにいたしました。



挨拶を終えて喜び合う学生たち

午後1時25分、734教室で交流会が開かれた。本学からは、国文学科2年生50名、茶道部員6名、木村好成理事長、中村幸弘学長、林田孝和国文学科長、田中憲二教授、塚越義幸教授、村山昌俊教授、伊藤高雄講師、白山実事務長、石坂昌園事務次長が参加した。会は、木村理事長の歓迎の挨拶につづき、本学・中村学長・林田国文学科長、漢陽女子大学金日語通訳科長からの挨拶、本学学生代表林田彩さん、漢陽女子大学学

昨年11月に教育・学術の交流促進を目的として韓国・漢陽女子大学と協定を締結後初めてとなる交流会が、6月26・27日の両日、本学園で行われた。
漢陽女子大学日語通訳科の学生39名と引率の金容安教授、黄虎哲教授、朴恩智助手は、6月22日から7月20日までの約1ヶ月間、国立オリンピック記念青少年総合センターを拠点に、日本語研修を実施した。その日程の中で計画された交流会である。一行は、6月26日正午過ぎ、本学園に到着した。バスから降りた学生たちは、長旅の疲れも見せず元気に挨拶をしながら学園食堂に向かい、昼食を済ませた。

漢陽女子大学日語通訳科の学生39名が来訪 協定校として初の交流会



「東照宮と日光社参」と題し、講話をする日本史学科の深井雅海教授

生代表が互いに挨拶を交換した。そして、朝賀唯さんが開会を告げた。
最初に、歓迎茶会として、浴衣を身に纏った茶道部部長の長澤萌さんが御点前を披露し、他の5名の部員とともに抹茶を振る舞った。各テーブルには、飲み物の他に季節の和菓子8種に解説をつけ、懐紙と楊枝を添えた。漢陽女子大学の学生と本学の学生が4名ずつ着席し、日本語で歓談をした。打ち解けた雰囲気の中、お互いのメールアドレスを交換し合っていた。最後

に、記念写真を撮影して交流会を終えた。

つづいて、733教室に移り、日本史学科の深井雅海教授により「東照宮と日光社参」と題して、日光東照宮・輪王寺、日光奉行、日光社寺に関する講話を聞いた。翌日の見学地の事前学習とあつて、真剣に聞き、学ぼうとする姿勢が印象に残った。

約1時間の学習後、校内見学を行った。音楽室で、室内楽研究会の演奏指導に來学していた打楽器奏者山本品子氏のマリリンバの演奏を聞き、図書館で太田映子館長の説明で館内を見学し、参考館の戸田正勝学芸員の説明で展示品を觀賞した。その後、バスで太平山に行き、ちょうど見頃を迎えていたあじさい坂で、紫陽花を見た。「紫陽花」の花

がこんなに大きく、たくさん咲いているのを見たのは初めての経験という学生も多かった。その時のことをそれぞれが綴った記録を後日送ってくれたのだが、その中のコメントを一部紹介する。「あじさいが宝石のようだった」「あじさいのいろいろな色が各自の個性を表しているようだ」「あじさいが私たちにメッセージを送ってくれているよ

うだ」「その美しさをそのまま写真に納められないのが残念だ」「石階段と自由に咲いているあじさいは神社の雰囲気とも良く調和していた」「栃木と聞けば、その美しい花と教職員の姿を思い出す」「雨と森の交流を見るように、私たちの大学と栃木の短大の交流をたとして見ているようだ」

見学後、宿泊先となった鎌倉館に入り、旅装をといた。学園食堂で夕食を摂り、ミーティングをした後、入浴・就寝となった。

翌朝7時過ぎ、学園食堂に元気な学生の姿があつた。昨夜の印象を尋ねてみると、「お布団が柔らかくて気持ちが良く、ゆつくり休めた」と返ってきた。

午前8時30分、学園を後にし、日光東照宮・日光二荒山神社に向かった。本学からは、中村学長・小林吉一名誉教授・石坂事務次長が同行した。午後1時過ぎ、日本文化の一端に接した学生は満足して東京へと向かった。

今回の来訪を契機に、学校間とはもとより個々の学生同志の交流を深め、自国以外の国の文化に触れ、視野を広げられることを期待する。

学びの夏 新しき力を培う

各学科の夏季研修・実習の報告 〈3〜5頁〉

国文学科

国文学科コース別研修旅行

国文学科では、毎年恒例の行事として、夏休み最後の週末を利用して、一年生を対象としてコース別課外研修を実施している。本年度も、8月29日〜30日の日程で、実施された。各コース別の概要は以下の通りである。

◆日本語・日本文学コース◆

本コースは、「江戸と東京の文学と歴史を学ぶ」をテーマに、



浅草寺旧本堂大棟の前で

古典文学・近代文学・日本語学に関係の深い博物館・文学館等を訪ねた。

初日は、まず両国駅に集合し、江戸東京博物館を訪ね、江戸・東京の文化と歴史に触れた。その後、特別展の「北京故宮・書の名宝展」を見学し、本邦初公開の王羲之の「蘭亭序」を堪能した。

午後は、地下鉄で深川へ移動し、芭蕉記念館や付近に点在する旧跡を訪れた。館内には芭蕉とその門人達に関わる展示が豊富で、俳諧の歴史について学ぶことができた。

二日目は、神田からお茶の水に移動し、湯島聖堂・ニコライ堂を見学し、神保町の古本街を自由に散策した。

神保町で昼食を摂った後、上野へ向かい、上野公園内にある東京国立博物館（本館・東洋館・法隆寺宝物館）を見学した。国宝・重要文化財等貴重な展示物が多く展示されており、大変見応えがあった。

この時、ちょうど本館で、特集陳列「六波羅蜜寺の仏像展」が開催中で、有名な平清盛像を初めとする、通常では見ることができない貴重な仏像を見学することができた。

また、先日クリスティーズのオークションで過去最高額で落札されて世間を賑わせた「大日如来座像」も実見することができ、大変有意義な研修であった。

◆創作文芸コース◆

本コースは、「創作の現場を訪ねて」をテーマに実施した。

一日目は、東京駅に集合し、電車で三鷹駅まで移動し、昼食を摂った後、玉川上水沿いの風の散歩道を歩いた。太宰治にゆかりの井心亭を訪れ、太宰が愛



三鷹の森ジブリ美術館の前で

した百日紅を見た後、栃木にも馴染み深い「山本有三記念館」を見学した。その後、学生達が大変期待していた「三鷹の森ジブリ美術館」に入館し、日本のアニメの制作現場の雰囲気存分に味わい楽しんだ。

二日目は、九段下に向かい、周辺を散策した後、昼食を摂り、その後、「神田の古書店街」へ移動し、そこで自由行動とした。漫画専門店を訪ね回る学生や、廉価な小説を買い漁る学生など、それぞれに本の街を楽しんだようである。三時半に九段下駅で予定通り解散し、それぞれ帰途についた。

◆民俗文芸コース◆

本コースは、「下総国における庶民信仰の古利と民俗文芸ゆかりの地を巡る」をテーマに、千葉・東京を探訪した。

一日目は、日暮里駅に集合し、京成線で佐倉へ向かった。国立歴史民俗博物館を訪れ、同館研究部准教授・関沢まゆみ先生の解説・指導のもとに、「日本人の民俗世界」をテーマとする第

四展示場を中心に、展示品を観た。

館内食堂で、古代米の昼食を摂った後、成田へ移動し、現世利益の不動信仰で知られる成田山新勝寺に参拝した。

新勝寺本堂では、この日最後



真間の手児奈霊堂前で

の「御護摩祈禱」を参観することができた。御護摩祈禱とは、不動尊を本尊としてその前に護摩壇を設け、護摩木という特別な薪をたいて、諸願の成就を祈る真言密教の修法である。

二日目は、市川に移動し、『万葉集』の伝説歌の美しいヒロインである真間の手児奈ゆかりの地、「真間の継橋」「手児奈霊堂」「真間の井」などを歩き、最後に両国の江戸東京博物館を参観し、両国駅前で解散した。

郷土文芸文学散歩

国文学科一年の民俗文芸講読（郷土文芸）履修生は、7月8日、講義で学ぶことの实地踏査として、栃木・佐野方面の文学散歩を行った。



唐沢山神社にて俵藤太物語絵巻を見る

見学地は歌枕として有名な室の八島、下野国府跡、三叡山・秋山川の万葉歌碑、『沙石集』や謡曲に出てくる佐野浅沼城跡のおしどり塚、唐沢山神社の「俵藤太物語絵巻」、岩舟町大慈寺の小野小町墓、国の重要文化財の村檜神社である。

見学地は、一見どこの村里でも見られそうな風景であるが、それだけに学生達はなぜ古典に登場するのだろうかという興味

が湧いてきたようだ。なお、車中や見学先での学生の態度や行動は実に立派であった。

家政学科

フード系見学会

フードスペシャリストを目指す家政学科1年生17名を対象として、フード系見学会が7月8日に行われた。見学先は栃木県南公設地方卸売市場、フレンチレストラン向日葵、マルハニチロ食品の3カ所であった。



栃木県南公設地方卸売市場を見学

今年からは新しい企画として、フレンチレストラン向日葵でのテーブルマナーを加えた。ホテルやレストランにおける食べ物や料理、食事マナー、食空間、テーブルウェア、などを学

び、快適な食事ができるような食のコーディネートを実践した。初めて見る卸売市場や「せり」、マルハニチロ食品での徹底した衛生管理など新しい発見であり、フードスペシャリスト取得に向け、大いに刺激になったと思われる。

保育学B幼稚園観察

7月10日、保育学Bを履修する家政学科2年生7名が二杉幼稚園で保育観察を行った。主任の稲葉幸子先生から観察の注意とともに、保育計画と、担任の先生方が子ども達の顔を思い浮かべながら綿密に書き込んだ各組の日報をいただいた。



プール遊びに歓声をあげる子ども達

その後、ホールでのきびきびした年長児の組体操や、夏らしくプール遊びに歓声を上げる様

子を見せていただいて半日の観察を終えた。

初等教育学科

学内演奏会

第34回学内演奏会は、7月9日午後4時半より、教育センター・レクチャーホールで開催された。より本格的な演奏会場の雰囲気を経験してもらおうという初の試みである。



ドレスアップしたコーラス部員の演奏

先ず初等教育学科2年生2名によるピアノ独奏。手堅い演奏を聞かせてくれた。次に、やはり初等教育学科2年生6名（男子2名）による独唱。小川沙織先生のピアノに乗って、イタリ

は、室内楽研究会の器楽アンサンブル。「見上げてごらん夜の星を」など3曲を演奏した。最後はコーラス部の演奏で、次回の定期演奏会で演奏が予定されている木下牧子作曲「愛する歌」より6曲の演奏で終演した。

教員採用試験に向け水泳研修

7月16日午前10時から栃木市のサンプラザスイミングクラブ（ウインズ）において、初等教育学科1・2年生を対象に水泳研修が実施された。

参加者は、2年生のみ男女11名で、うち男子1名は水泳部出身であった。当日は会員のコース予約がなく、全コースを使いバタ足、ビート板を足に挟み手のかき方、息継ぎ等基本練習を存分に行った。その後、採用試験の種目である「25メートル」をクロールと平泳ぎを中心に練習した。

今年の参加者は意欲的で半数以上が25メートルの潜水にチャレンジし、5名が成功し、飛び込みも積極的に練習した。2時間の研修であったが、各自が自分の課題を把握し、水に慣れることもでき、試験に向け意義あるものとなった。

日本史学科

史跡調査研修

今年度の史跡研修は、7月8日に、栃木県埋蔵文化財センター、しもつけ風土記の丘資料館、そして宇都宮市の大谷寺と大谷資料館を見学した。埋蔵文化財センターでは、収蔵庫や保存化学室、そして実際の遺物の整理作業の様子を見学することができた。埋蔵文化財センターでは、本学卒業生が多数整理作業に携わっており、先輩の活躍に学生たちも刺激を受けたようであった。



橋本澄夫講師の解説に耳を傾ける学生

大谷寺では、本学橋本澄夫講師の解説で千手観音像などの貴重な文化財をみることで、

また大谷資料館では地下数10メートルの深さの大谷石の採掘場を目にすることができた。

古文書調査実習

7月15～17日の3日間、本学において2年生の日本史コース「古文書学演習」履修学生と古文書研究会学生の調査実習として、日本史学科所蔵の岐阜県大野郡七崎村戸長総代高田藤八家文書を使い、史料整理と目録作成を実施した。指導教員は、田中正弘学科長、鍛代敏雄教授、深井雅海教授の3名。本学科の学生30名が参加し、3日間で230点の目録を作成した。



熱心に古文書に取り組む

2年生の齊藤文子さんは、「大変根気のある作業だったが、

先生方の教えを受けながら一つ一つじっくり読み進めることができた。古文書漬けになることで、少しは読む力が付いてきたように思う」と感想を語ってくれた。

考古学フィールドワーク



円通寺古墳での墳丘発掘

考古学フィールドワークでは、栃木県栃木市に所在する約40メートルの前方後円墳、圓通寺古墳の第五次調査を行った。調査は、8月21日～29日まで参加延べ人数約50名で実施した。今年は、雨が続くなか、前方部の墳丘上を調査し、人物埴輪などの破片が多数出土した。昨年同様、國學院大學に編入した卒業生が後輩の指導にあたった。

考古学研究室の調査では、8月4日～12日まで新潟県長岡市にある縄文時代中期（約5千年前）の山下遺跡の第五次調査を行った。これらの本調査は、今後進めていく予定である。

歴史民俗フィールドワーク

7月12日に、歴史民俗フィールドワークの学外調査実習が行われた。この実習は、地域史を明らかにしていく上で基本となる、現地踏査と実物の資料調査を学ぶためのものである。2年生24名が参加して、埼玉県鷲宮町の鷲宮神社をテーマとして実施した。



貴重な資料を熟覧する学生

午前中に鷲宮町立郷土資料館にて展示を見学し、境内絵図と棟札を熟覧、午後は門前町と神社境内の踏査を行った。猛暑の中であつたが、現地で実物の歴史資料に触れながら、某アニメの影響で賑わいをみせていた鷲宮神社の歴史を、肌で学ぶことができた。

博物館実習



学芸員の解説にメモをとる学生

7月10日と17日に、学芸員課程受講者の、博物館実務見学実習が行われた。10日は2年生37名が佐野市立郷土博物館・栗田美術館（足利市）、17日は1年生35名が栃木県立博物館をそれぞれ収蔵庫・作業室などを、学芸員の解説を受けながら詳細に見学し、学芸員の業務を学習した。栃木県立博物館では、広大なトラック・ヤード、セキユリティが完備した収蔵庫など、博物館の中身を体験することができた。

体験する貴重な学び

夏期教育研修
初等教育学科 教育の観察と参加

長年にわたって実施されてい
る、本学初等教
育学科独特の教
育現場体験学習
として、1年生
の『夏期教育研
修』が6月16日
から19日までの
4日間、また、
2年生の『教育
の観察と参加』
が6月16日から
20日までの5日
間実施された。

夏期教育研修

これは入学して2ヶ月しか
たっていない1年生に、幼稚
園・小学校教員免許の取得と
いう所期の目的を自覚させる
ために行っている行事であり、
園児・児童の視線では経験の
ある幼稚園・小学校を、改め
て教師を目指す学生という視
線で再認識させようとするも
のである。

初日の16日、学生たちは栃
木市内の若葉・アルス・栃木
みどり・二杉幼稚園の4園と、



吉水小学校で観察する学生たち

栃木第一・栃木第三・栃木第
五小学校の3小学校とに分か
れて『一日観察』を行った。
この日、学生たちは登園・登
校からオリエンテーション、
保育・授業の観察、昼食や清
掃指導まで含めて、それぞれ
の一日の流れを体験した。さ
らに、園長・校長先生からの
講話、本学卒業生などの先輩
教師の体験発表や座談会での
質問や感想を通して2年間の
学習の動機づけがなされた。

翌日からは二泊三日の『あ
きやま学寮宿泊研修』が行わ
れた。
一日目、あきやま学寮に到

着してすぐに開講式と昼食を
とり、その後3時間半の観察
研修ではグループ別に栃本市
内の幼稚園・小学校観察のま
とめと発表がなされた。夕食
後には学生企画の表現活動を行
って初日が終了した。二日
目午前中は3班に分かれて佐
野市内の犬伏幼稚園、こぼと
幼稚園と吉水小学校を観察。
栃木で幼稚園を観察した学生
は佐野では小学校を観察する
ことで、幼・小両免許を取得
できる初等教育学科の特性に
対応させている。昼食後は昨
日に引き続いて観察研修を行
い、この日の観察のまとめと
発表も行われた。夕食後には
キャンプファイヤーを囲んで
親ぼくを深めていた。最終日
は宿泊研修の感想を述べ合う
「ひとりひとこと」、閉講式
を行い、宿泊研修は終了した。
これら4日間にわたる教育
研修の内容は、学生たちの手
によってまとめられ、『夏期
教育研修の記録』として発行
される。

教育の観察と参加

初等教育学科では幼稚園・
小学校の両免許を取得できる

にもかかわらず、主専攻の学
校種のみでの教育実習しか行
っていない。そこをカバーす
るため、10月の教育実習とは
反対の学校種で5日間の「観
察と参加」を行うという配慮
をしている。

協力していただいたのは主
として出身の12幼稚園・33小
学校であった。保育・授業は
もちろんのこと、その他の教
育現場の実際を観察するにと
どまらず、一歩踏み込んで、
許される範囲ではあるが指導
の先生方の助手のような形で
保育・授業の準備や学級経営
・管理事務などの仕事に参加
させていた。だくことで、貴重
な体験を積むことができた。

第12回

初教このはな会総会

5月24日の午後、教育セン
ターのレクチャーホールにお
いて第12回初教このはな会総
会および20年度研修会が開催
された。毎年研修会では幼稚
園や小学校で教職についてい
る卒業生とこれから教員にな

ろうとする学生のために役立
つ講演会などを企画している。
今回は平成20年3月に新しく
小学校学習指導要領に加えら
れ、平成23年度より、全ての
小学校で5年生から実施され
る「外国語活動」すなわち小
学校英語について、下都賀教
育事務所指導主事で英語担当
の平山裕先生をお招きし「子
どもと共に楽しみ学ぶ小学校
英語活動」というテーマでお
話いただいた。

小学校英語の理念は「英語
嫌いを作らない」で、従来の
中学校英語の反省から身近な
やさしい英語を「聞く・話す」
を中心に、同じ表現を活動を変
えて繰り返し方法で展開す
る。講演では、袋の中のサイ
コロなどを使って自然に数の
表現に親しむ遊び感覚の楽し
い授業を実演して下さった。
そして小学校英語における担
任教師の役割は、ネイティブ
のALT(外国語指導助手)の
英語をクラスの児童と共に学
ぶ、学習者のモデルとなるこ
とだと説明され、児童を一番
よく知っている担任がALT
と協力して活動を作っていく
重要性を教えていただいた。



中村幸弘学長

オープンキャンパス

学長のミニ講演会でスタート
初等教育学科保育士課程計画中也発表

平成20年度、オープンキャンパスが7月19日、8月2日、8月23日、9月6日に開催された。本年度は、大学進学に対する種々の環境変化に対応するため、新規性のあるものとするため、従来のオープンキャンパスの名称をオープンキャンパスと改めた。また、総合説明プログラムに、中村幸弘学長による四回シリーズ（本学の入試・教育姿勢・入学者に約束すること・國柄総合教養という科目）のミニ講演会を取り入れた。一回15分ではあったが、参加生徒はもちろん、保護者にも印象深いものとなった。さらに学生会が作井智治会長を中心に積極的な活動し、会場誘導・施設ガイド・学生と語る相談コーナー



学生との相談コーナー

の運営を行った。参加生徒と保護者は、直接、在学生と接し、生の本学の姿を観察して、いつそう感慨を深めていた。人口減少と、大学全入時代到来の波は、短大離れを一段と進行させている。短大入学者希望者へのアピールを目的とするオープンキャンパスへの参加者の減少が取りざたされていた。本学においても、懸念され、例年以上に、広報活動に力を入れた。その結果、総合計で561名の参加をみた（19年度比、14名減）。年々増える保護者の付き添い率は、68・5%（19年度比、19・6

%増）に達し、生徒に対する対策とともに保護者への影響力を考慮したものにすることが高まった。参加者は、山形県から大阪府までの12府県におよび、高校数では129校であった。

スケジュールは、一部の全体会（60分）、二部の施設見学（30分）、三部の学科会（90分）、12時30分から15時30分までと、自由参加の学生と語ろうで編成された。全体会では、学長と教育学部が主体となり、ミニ講演、本学教育の特色とその成果の紹介、新設課程・コースの発表、21年度入試制度についての説明を行った。学科会では、学科長を中心に、カリキュラム内容、資格取得、進路特色を具体的に説明し、コース・専攻の特色が分かる模擬授業を行った。学生との相談コーナーでは、和やかな雰囲気の中で、生徒の質問より保護者が熱心に、修学の満足度や学びの成果を聞き出す話題を出している場面もあった。

平成21年度入試教員対象説明会

3種類をあらたに加え、

3タイプ13種類の入試

6月5日、10時30分から西

三号館大会議室において平成21年度学生募集に関する高等学校教員対象説明会が開催された。参加校は、招待した栃木・茨城・群馬・埼玉県から、35校であった。説明会には、中村学長・五学科長・入試委員長・事務長・学生課長が出席し、学生募集制度説明・施設見学・学校別相談を行った。

会の進行に先立ち、学長は、本学が目指す高等教育機関としての教育の展望を示した。学科長は、教学面での特色を強調した。特に、初等教育学科では、念願であった保育士資格課程新設の計画が、関東信越厚生局へ提出されていること、日本史学科が、新三コース制を導入することの説明を行った。

事務局が担当した学生募集では、商学科の学年定員を60名に改定すること、育英制度としての奨学生入試・センター試験利用型入試・國學院大學受験者対象入試を新たに導入し、3タイプ13種類の試験を実施することを、試験別定員を示して具体的に説明した。また、國學院大學が人間発達学部を開設し、その初等教育学科に本学から三年編入が認められ、小学校・幼稚園教諭一種免許状取得の一貫教育が可能になることを紹介した。

國學院大學開催の
オープンキャンパスに参加

國學院大學が開催したオープンキャンパス（7/20・21、8/26・27、9/21）に、本学個別相談ブースが設けられ、石坂昌園学生課長他三名の教育学部職員が日程にあわせ担当した。これは、男女共学化以来、学生の修学面で國學院大學との連携強化を図ってきたが、学生募集においても、「栃木に入学、渋谷で卒業」の口ゴで、國學院大學受験者対象入試を設けた。その趣旨に基づいての、オープンキャンパスへの参加である。

高校生のためのサマースクール
日本史学科

夏季を活用して、例年実施している、大学で学ぶ日本史の魅力を知るサマースクールが、7月31日から8月2日、陸会館を会場に行われた。講座は、明年からの新コース制にあわせて行われた。

恩師・旧友との再会

第41回 斯花会・懇親会開催

第41回斯花会総会・懇親会は、7月20日正午より、東京帝国ホテル「富士の間」を会場として恩師教職員51名、会員53名が参加し開催された。



再会を祝して乾杯

斯花会総会・懇親会は昭和50年以降、栃木（母校）と東京方面を隔年で開催しており、今年は東京での開催に参集した多くの会員たちが、恩師・学友と旧情を温めあった。

総会は、斯花会幹事長岡本岱教授の挨拶のあと、平成19年度決算と平成20年度予算（別掲）が報告された。

懇親会では、中村幸弘学長、木村好成理事長から挨拶をいただき、国文学科長林田孝和教授の発声により乾杯。その後、母校の近況などが報告され、和やかに会は進行し、校歌斉唱をもって閉会した。

平成19年度斯花会収支決算書

【収入】	(単位：円)
会費	10,680,000
受取利息	55,510
雑収入	10,000
前年度繰越金	3,563
合計	10,749,073
【支出】	
事務費	3,630,802
事業費	545,700
積立基金	6,500,000
次年度繰越金	72,571
合計	10,749,073

平成20年度斯花会収支予算書

【収入】	(単位：円)
会費	8,730,000
受取利息	50,000
雑収入	20,000
前年度繰越金	72,571
合計	8,872,571
【支出】	
事務費	4,550,000
事業費	3,050,000
積立基金	1,200,000
予備費	72,571
合計	8,872,571

第60回 毎日書道展に多数入選

指導教員

審査会員出品

近詩部	佐伯	司朗先生
近詩部	田中	暁亭先生
近詩部	佐伯	方舟先生
近詩部	坂本	充正先生
近詩部	大木	司慎先生

書道家への登竜門と呼ばれ、国内最大規模を誇る『毎日書道展』（毎日新聞社、財団法人毎日書道会主催）に在学・聴講生・卒業生が多数入賞・入選し優秀な成績を収めた。

会友出品

かな部 相 司禮先生
在校生 U23近詩部入選
国2 渡辺 千曉
史2 園部 栄仁

聴講生 (内は卒業期)

近詩部佳作賞 (20) 栗城 司育
かな部入選 (20) 栗城 司育
五月女慎耀 田中 正代
寺内 礼子 (16) 茂木 千草

卒業生 近詩部会員出品

(8) 前橋 司澄	(11) 渡邊 司寶
(13) 梅澤 司翔	(15) 加藤 司玲
(16) 佐下橋 司節	(17) 大川 司寛
(19) 松藤 司嘩	(22) 松原 司曠
かな部佳作賞	(10) 星 司光
近詩部佳作賞	(20) 関川 司晶
(24) 渡 司歳	
かな部会友	(3) 石崎 司滯
(19) 末政 司麗	(20) 内山 園祥

近詩部会友

(25) 橋本 雅洞 (31) 山田 孝徳
(16) 森作久仁子 (20) 小沼 司眞
(21) 齋藤 英媛 (21) 田中 惺寶
(22) 飯塚 恵邦 (25) 岡本 令
(26) 佐々木司風 (27) 小林 照実
(28) 大谷 司清 (31) 中野渡 司順
かな部会友入選 (20) 関川 司晶
(24) 渡 司歳 (26) 佐々木司風
(28) 大谷 司清 (31) 中野渡 司順

近詩部会公入選

(10) 星 司光	(19) 末政 司麗
かな部入選	(11) 大永 恭子
(13) 塚田 慎媛	(17) 細谷 光子
(18) 太田 貴子	(18) 星野 順子
(22) 山崎 史江	(37) 阿久津 寶綵
近詩部入選	
(35) 厚木麻依子	(35) 内藤さつき
U23近詩部入選	
(39) 渡邊 寶禮	

田部井トキ先生 ご逝去



平成10年3月まで、家政学科で被服構成及び実習(和裁)・被服材料学・被服整理学をご担当いただきました田部井トキ先生が9月13日ご逝去されました。享年85歳。

先生は、昭和30年3月和洋女子大学家政学部を卒業。栃木県立足利女子高等学校、郡山女子大学短期大学部などで

教壇に立たれながら勉学を続けられ、昭和45年11月には、群馬大学で医学博士の学位も取得されました。本学へは昭和58年4月より15年間お勤めいただき、平成5年4月より平成7年3月まで家政学科長も務められました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

プロフィール

若林奈緒(わかばやしなおさん)
茨城県在住。

栃木県立宇都宮北高等学校から
本学家政学科に入学。
卒業後キュービー株式会社F C
工場(茨城県)に入社。

半年がたって

私がキュービー株式会社に
入社して、はや半年が過ぎよ
うとしています。私は1ヶ月
の研修期間を終え、現在、製
造課に配属され、直接製品を
作る仕事に就いています。製
造に携わる為、機械の動かし
方など、今まで体験したこと
のない感覚や知ることばかり
で、私には入社をしてからの
毎日が新鮮で、楽しく、大変
で、あっという間に過ぎてい
きました。

社会人と
学生の違い

入社をして、仕事をしてい

る中で違いを感じることは、
自分が成長することに関して、
社会では目に見える形で私た
ちの前に現れてはくれないと
いうことです。学生の時は、

科目・講義が用意

され、自分の知識
を深める場がはっ
きりと見える形で
準備されていますし
た。私たちはただ
「選ぶ」ことで成
長の場合が与えら
れていたのだなど、
今振り返ると思う
のです。社会人に
なつて全く機会が
与えられないわけ
ではありません。

ですが、社員として、一人の
社会人として自立していくに
は、自分自身で成長の場を見
つけ、用意し、やり遂げるこ
とが大切なのではないかと、
強く思うようになりました。

生き生き卒業生 ②4

大切なのは「挨拶」と「笑顔」

第41期生家政学科 若 林 奈 緒

学生時代を
振り返って

私は短大での2年間で家庭
科教諭・フードスペシャリス
ト・カラーコーディネーター
など、生活科学を
主体に学び、資格
を取得しました。
現在の仕事でこれ
らが直接活かされ
る場はあ
まりあり
ませんが、
学んでき
たものは
絶対に無
駄にはな
らないと
思ってい

ます。國學院大學栃
木短期大学での講義
は、学びたいものを
学びたいだけ、広い
分野を学べる、とて
も魅力的なものばか



職場の皆さんと… 写真中央で微笑んでいるのが若林さん

りです。そして生活に密着し
た講義内容は活躍の場を選び
ません。家政学科で学ぶこと
は必ず私たちの役に立つてく
れます。『勉強』という構え
でなく、先生方は私たちが力
を存分に伸ばせる場所を提供
してくれていたのだと、卒業
してからも「楽しかったな」
「良かったな」と思い出すこ
とができます。

仕事を楽しく
するために

大切なのは自分で周りを明
るく楽しくすることです。私
はその為に「挨拶」と「笑顔」
は絶対に忘れないようにして
います。日々、笑顔で挨拶を
することだけで、周りの方々
は優しく話しかけてきてくれ
ます。また、一方で、職場の
方々から「おはよう」と笑顔
で声を掛けられたら、どんな
に落ち込んでいても、その一
声で一日が明るく過ごせます。
たかが「挨拶」ですが、笑顔
で「挨拶」は人とのつながり
の第一歩。これからも続けて
いこうと思います。

私は今の自分の仕事に誇り
を持って働いています。これ
からも楽しく、笑顔で頑張っ
ていこうと思います。國學院
大學栃木短期大学を卒業でき
て、この仕事に就けて本当に
良かったと思っています。

図書館だより

復刻文芸雑誌 20

特別コレクション③②

三回目になる「復刻版 近代文芸雑誌稀少十種」(紅野敏郎編 雄松堂出版 平成19)のうちから数種紹介する。

『新興』 創刊大正13・3 新興社(雄松堂複製 平成19 1冊)

創刊号にして終刊号となつてしまつた同誌は、中村直幸を編輯兼発行人として刊行された総合雑誌。

関東大震災直後に出版された同誌には、志賀直哉の「震災見舞(日記)」が載り、災害時の背景を窺わせる。

編集兼発行人の中村直幸については未だ確たる経歴は判っていない。

約三百ページに近い厚みのある『新興』の内容は、文芸に偏らず、政治、経済、時代思潮と総合雑誌としての体裁を整えている。

文芸の方面を特に見れば、今野賢三、神原泰、萩原朔太郎、村山知義、志賀直哉、木

下利玄、泉鏡花ら多方面からの執筆者が並ぶ。

表紙の真ん中に大きく誌名が記され、厚みというタイトル文字といひ発刊に際しての心意気が迫つてはくる。

『芸術運動』 創刊大正14・9 芸術運動社(雄松堂複製 平成19 1冊)

中野武雄を編集人、鷹巢清治を発行人とした同人誌。

表紙は山村耕花の影絵が飾る。誌名が示すとおり、文芸だけでなく、山村豊成の「東洲斎写楽のこと」、又「耕花コレクシヨン」磁洲黒釉劃花の壺の写真が挿入されている。

中野敏夫が中心となり、森孝一、中野秀人、神原泰、原奎一郎、楠田敏郎、鷹野つぎらが同人となり発足。

文芸においても小説中心ではなく、戯曲、評論などに亘る。

詩では中西悟堂の「向日葵」、丸山定夫が詩を発表している

のも珍しい。小説では、中野秀人の短編「甚助の街」が秀逸とされる。

演劇の領域では楠田敏郎の他、星野潤一が執筆している。

紹介とはいえ神原泰の「ピエール・ルイの死」は海外文芸への眼を開かせた一文である。

『春鶯囀』 創刊大正15・1 終刊大正15・5 春鶯囀(雄松堂複製 平成19 1号・3号・4号の3冊)

原民喜と石橋貞吉(山本健吉)の二人の文学者が登場した同誌は、熊平武二が編輯兼発行人となり実質的な推進役ではあったが、何よりも石橋貞吉、原民喜の出発点となつた雑誌であることが大きなこと。

又、第三号に意味がある。石橋貞吉の父石橋忍月が、大正十五年二月に死去していることから、さながらこの号は忍月追悼号の意味を持つ。巻頭に忍月の「(楽只庵遺稿抄)」十五句が掲げられ、つづいて石橋貞吉の「寂滅悲唱」と題した挽歌が掲げられている。

挽歌の続は第四号にある。

図書館長 太田映子

事 報

行事・集会

6月2日 国文・家政・日本史学科2年生教育実習(養護のみ21日まで)

28日 高等学校教員対象入試説明会

7日 1年生歌舞伎鑑賞教室(国立劇場)

16日 初等教育学科1年生夏期教育研修

19日 初等教育学科2年生教育の観察と参加

7月7日 授業終了

8日 集中講義・補習講義

8日 国文学科1年生文学散歩

8日 家政学科1年生フー

8日 日本史学科1年生史跡調査研修

9日 学内演奏会

10日 日本史学科2年生学芸員課程博物館見学

12日 初等教育学科講演会(紙しばい)

12日 日本史学科2年生歴史民俗フィールドワーク

15日 日本史学科2年生古文書調査実習

17日 日本史学科1年生学

芸員課程博物館見学

17日 初等教育学科音楽発表会

19日・8月2日・23日・9月

6日 オープンキャンパス

20日 斯花会総会

31日・8月1日 高校生のためのサマースクール

8月4日 日本史学科考古学フ

12日 (新潟県長岡市)

21日 日本史学科考古学フ

29日 (栃木市)

29日 国文学科コース別研

30日 修旅行

9月1日 授業再開

13日 前期授業終了

16日 前期試験

26日 就職に役立つ新聞の活用(講話)

26日 就職模擬試験

29日 後期授業開始

○中村幸弘教授著「読んで楽しい日本の唱歌Ⅱ」 右文書院刊

○田中正弘教授著「幕末維新期の社会変革と群像」 吉川弘文館刊

○鍛代敏雄教授著「戦国期の石清水と本願寺」 都市と交通の視座 法蔵館刊

○科目等履修生神山泰子著「花の名の物語」 下野新聞社刊

○科目等履修生神山泰子著「花の名の物語」 下野新聞社刊

参考館資料解説

41

遮光器土偶

— 最古の土の芸術 —

わが国最古の土の芸術ともいえる土偶は、縄文時代を通じて作られたが、その使用目的や用途などは不可解な部分が少なくない。

ここに紹介する遮光器土偶（頭部のみ現存は、昭和62年当時、小学生だった北村一人氏が発見したもので、國學院

大學栃木高校に入学して間もなく参考館に寄贈された資料である。春日部市の花積貝塚から出土した。

縄文時代晩期の前半には、東北地方を中心に遮光器土偶とよばれる芸術性の極めて高い土偶が発達し、関東ではそれを模倣したと思われる土偶

が作られた。この土偶もその一例である。土偶の目がエスキモーの雪メガネ（遮光器）に似ていることからこの名が付けられている。

花積貝塚は、縄文前期花積下層式の代表的な遺跡であるが、晩期の遺物は知られていないので、本例は貴重なものといえる。おそらく中空の大形土偶で、円錐形の頭の部分には、大きな四角の貫通孔がある。その下に沈線（ちんせん）で遮光器状の目が表現されている。目の間には突起した鼻があるが、鼻孔は尖った棒状工具で刺突され、穴が開けられている。頭頂部には楕円形の突起が付けれられ、また首の部分には晩期の土器に見られる三叉状文（さんさじょうもん）が施されている。類例は埼玉県岩槻市の真福寺貝塚から発見されている。この真福寺例も、遮光器土偶の変形したものである（江坂 1960）。

遮光器土偶は縄文文化の最後をかざる亀ヶ岡文化に特有のもので、雪メガネをかけたような大きな目が特徴的である。このような土偶は青森・岩手・秋田など奥羽地方に分布する。

ところで、わが国の考古学研究は明治11年の大森貝塚の発掘を契機に進展し、土偶に関する研究も盛んになった。土偶の用途を推定する仮説も多く提出されるようになり、神像説、玩具説、守り札説、女神像説など多岐にわたる仮説が発表されている。

今日では地母神像説、呪物説なども加わっているが、江坂輝弥氏は、土偶が女性であることから女性の出産という生殖力に対する神秘性が豊産を祈る神へ転化し、神格化されたものと考えている。

また土偶を第二の道具（当時の人々の心の世界を映す品々）と考えている小林達雄氏は、このような遺物は直ちに機能・用途を推定することのできないもので、縄文人の世界観が作り上げた精神的な糧を得るための道具であると考えている。

土偶は破損して発見されることが多く、最後は人為的に壊され、ばらまかれるという事実が明らかになってきた。生まれながらに壊される運命にあったのである。

学芸員 戸田正勝

もつところ

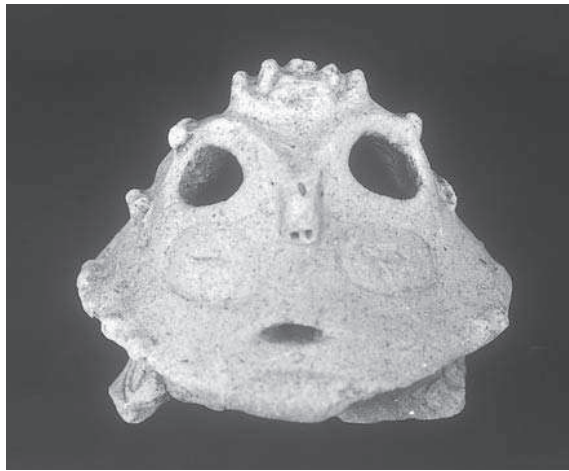
今夏は炎暑・猛暑づくきであった。九月になり前期試験が終わる頃になって、台風十三号が関東地方を通過すると、急に気温も下がり、爽やかな風が吹いて秋を思わせるようになった。

秋は芸術の秋、読書の秋、物思いにふける秋である。人間が思考する動物であつてみれば、人間らしさをいや増す季節でもある。

○ 世の中は、苦しいものでも悩ましいものでもない。この世は、本質的には楽しい、うれしい、そして調和した美しい世界なのである。与えられた命を大切に、向上心に燃えて、日々努力を重ね、精進するならば。

生活の情味を味わわずに生活している人には、本当の人間としての生活はない。もつといえ、人間の幸・不幸は、生活の情味を味わって活きるか否かにある。貴賤貧富などは第二義的なものである。実際、唸るほど金があつても、地位や名誉があつても、生活の中の情味を味わおうとしない人には、本当の幸福は味わえないものである。

(好)



遮光器土偶

埼玉県春日部市花積貝塚出土

高さ 9.9 cm

東北の遮光器土偶を関東の縄文人が模倣して作った土偶。遮光器（雪メガネ）の表現がユーモラスである。

初等教育学科講演会

すてきな紙芝居の世界

壁画家・紙芝居作家 松井エイコ氏をお招きして

初等教育学科の講演会が七月十二日、壁画家・紙芝居作家の松井エイコ先生をお招きして行われた。松井先生は、日本有数の壁画家として全国各地に「人間」をテーマとした壁画、モニュメント、ステンドグラス百三十以上を創作された方である。そして、近年、紙芝居の創作と普及に力を注がれ、日本各地はもちろん世界中で講演活動を展開されているお忙しい先生である。



学生と心をひとつにして語る松井エイコ氏

講演に先立ち松井先生は「私を先生と言わないで、エイコさんと呼んでください」と優しくおっしゃった。何でもない一言だったが、話を聞く学生たちとエイコさんの距離がぐっと近づいた気がした。話の前半は・「紙芝居の魅力の秘密」と題して、紙芝居を支えている心についての話だった。エイコさんと壁画の出会い。お母さんを通して、戦争への深い怒りを知ったこと。埼玉のある私立高校に描いた壁画を前に生きることに悩む高校生との心のふれ合い。そんな人と人の心のつながりの話が、みんなの心を打った。紙芝居を創り、紙芝居を演じるのは単なる技術ではない。人が人として生きていくためには、個性が生きて、そしてお互いに共感するという感性が必要だというエイコ

さんの思いと優しさがみんなの心に染みわたった。

後半は、紙芝居の演じ方と選び方のお話だった。エイコさんの創作紙芝居をいくつか実際に演じて見せてくださった。三面開きの舞台の右側にすくっと立つ演者。歯切れのいい声。心を込めて画面を抜く手、差し込む手。大勢の観客に対して、決して画面は大きくない。テレビのように動きはない。しかし、その小さな画面を媒介にして、演者と観客の心が確かにひとつに結びついたという実感があつた。

最後に、これも松井先生の創作された「二度と」が演じられた。原爆の悲惨さと、戦争に対する限らない怒りが込められた作品だった。おしまいの一枚になって、締めくくりに「二度と」という言葉が静かにしかし凛と会場に響き渡った。そして、三面開きの扉がゆっくりと閉じられる。その間、深い静寂があつた。紙芝居について学ぶと同時に人の生きるということの重みについてすばらしいものを得ることのできたひとときだった。 文責 正木孝昌教授

修学を支援する育英制度を制定

(平成21年4月1日から施行)

平成20年9月1日付で、在学学生を対象とする、育英奨学金および表彰制度を制定した。この制度は、本学に学ぶ学生が、いっそう学問、学生生活に励む活力となるように制定されたもので、2学年進級時に、該当の機関の選考により採用された学生に給付・支給される。

◎ 成績優秀者育英制度

この育英制度は、1年次に特に優れた学業成績を修めた学生の育英をはかることを目的として設ける制度である。

採用者には、奨学金 年額30万円を給付する。

採用人数は、2学年 10名以内とする。

◎ 学生表彰制度

この表彰制度は、1年次に優れた学業成績を修めた学生を表彰し、勉学を奨励するために設ける制度である。

採用者には、表彰状を授与し、報奨金5万円を支給する。

採用人数は、各学科2名以内を原則とする。

上記の制度は、第43期学生から適用される。学生の皆さんは目標の一つとして、努力して欲しい。

第43回 全国私立短期大学体育大会

男子バスケットボール 第3位



第43回全国私立短期大学体育大会（日本私立短期大学協会主催）が8月5日から8日まで開催され、日本大学（船橋校舎）体育館を会場にした男子バスケットボール競技で、本学バスケットボール部が第3位の成績を収めた。